2022年3月13日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書4章35〜41節
説教題：どうしてこわがるのです

「父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安が皆様の上にありますように」(1 コリント1:3参照)、お祈り致します。

「隠れ家」という映画で有名な「コーリー・テン・ブーム」というオランダ人がいます。彼女の家族は、戦争中、ナチス占領下のオランダでユダヤ人を匿いました。それが見つかって、家族全員がナチスの強制収容所に入れられます。映画では、家族6人がトラックに乗せられた時、ナチスの兵士がお父さんに聞くのです。「全部で6人か」。お父さんは言います。「7人だ。イエス様が一緒だ」。信仰によって、自分達の出来ることを精一杯した驚くべき家族でした。戦争が終わり、コーリーは収容所を生き延びて、戦後は「赦しと和解」を呼びかけ続けました。「デイリーブレッド」というデボーションの本で彼女の次の言葉に出会いました。「世の中を見れば、心が騒ぐでしょう。自分自身を見れば、落ち込むでしょう。しかし、キリストを見上げれば、心に平安が訪れます」。今日の説教は「この言葉に要約される」と申し上げても良いと思います。そういう意味で、最初にこの言葉を「結論」としてご紹介しました。

いつものように「内容」と「メッセージ」と、2つに分けてお話しします。

1. 内容：イエスが求めた信仰

時は夕方です。イエス様は、一日中、船の上から説教をして、疲れ切っておられたでしょう。船を下りて岸に上がるのではなくて、「向こう岸」に渡ろうとされました。岸辺に押し迫っている群衆から逃れるためだったかも知れません。あるいは向こう岸―(異邦人の地)―にまで伝道を広げようとされたのかも知れません。いずれにしても弟子達は、イエス様を乗せて船を漕ぎ出しました。

夜、漁に出ることに慣れている漁師を中心とした弟子達にとって、湖に吹き始めた突風も、初めの内は「いつものことが始まった」という程度のものだったかも知れません。ところが、その風が、いつもとは随分と違う激しいものとなり、舟が水浸しになって、「もしかしたら舟が沈むかも知れない」という状況になって来たのです。舟のことを良く知っているからこそ、彼らには「自分達の経験や力を越えるとんでもない状況になった」ということが分かったのです。慌てます。恐れます。ところが「イエス様は？」と見ると、舟の艫の方―(船尾：少し高くなっている所)―で、舟で使う座布団か何かを枕にして寝ておられました。その姿を見て、彼らは叫ぶのです。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか」(38)。するとイエス様は「起き上がって、風をしかりつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われ」(39)ます。これで嵐が静まるのです。

問題は、イエス様が嵐を静めた後に弟子達に対して言われた言葉です。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです」(40)。イエス様は、弟子達の「何を」叱っておられるのでしょうか。また、弟子達に「どのような信仰の姿」を願っておられたのでしょうか。ある人は言うかも知れません。「弟子達は嵐の中でイエス様に助けを求めた。これは信仰ではないか。『多くの人々が「先生、助けて下さい」とイエスの許にやって来た』、それと同じものではないか」。私達も良く口にします、「神様、助けて下さい」。一体、彼らの「何が」悪かったのでしょうか。

問題は「この時、弟子達がイエス様に助けを求めて叫んだ言葉が、本当に信仰から出た言葉

だったのか―(信仰の言葉だったのか)―」ということです。恐らくそうではありません。彼らは「イエス様なら嵐を静めることが出来るに違いない」と思って助けを求めたのではないと思います。なぜなら、イエス様が嵐を静めた後、「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った(のです)。『風や湖までが言うことをきくとは、一体この方はどういう方なのだろう』」(41)。「イエス様ならきっと何とかして下さる」と確信を持って叫んだのなら、「恐怖に包まれる」ことはないでしょう。喜んだはずです。では、彼らの中にあったのは何でしょうか。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」(38)。この言葉は、「信仰の言葉」というより「恐らくイエス様に対して腹を立てている言葉」です。「私達だけがこんなにハラハラして命の危険まで感じているのに、この方は私達のことを少しも考えて下さらないだろうか。なぜ私達を無視されるのだろうか」。そして彼らの心には、「疑い」がやって来たかも知れません。「もしかしたら、イエス様は眠り続けておられるのではないか。結局イエス様だけは嵐の中で助かって、私達だけが滅びるのではないか」。この言葉には、そういう思いさえ込められているのではないでしょうか。

イエス様が、やがて湖の中に進むべき道を造って下さったことを思う時、「出エジプト記」の紅海の出来事と重なります。モーセに率いられてエジプトを出発したイスラエルでしたが、エジプトのパロの軍勢が彼らを追って来て、前は海、後ろはエジプト軍という危機的な状況に追い込まれた時、イスラエルの人々はモーセに食って掛ります。「エジプトに墓がないので、あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるの…か…いったい何ということを…してくれたのです」(出エジプト 14:11)。しかしモーセは言います。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい…主があなたがたのために戦われる」(同 14:13～14)。しかし、いずれにしても民はモーセに、そして神様に、腹を立てたのです。この「神様に―(イエス様に)―腹を立てる」ということは、しばしば私達にもやって来る思いではないでしょうか。「神はなぜ私を放っておかれるのか。結局、神は私に関わって下さらないのではないか」。先日も、私が昨年、鬱になったという話をしましたが、私は鬱状態の中で、この「疑い」に襲われ、翻弄され、そして弟子達と同じ叫び声を上げていました。弟子達の姿と自分の姿が重なります。「神様。なぜこの状態を放っておかれるのですか。私がこんなに苦しんでいるのに、何とも思われないのですか、何もされないのですか」。神に腹を立てている自分、そしてやがては、あたかも神がおられないかのように叫び、神様に背を向けて見せる自分がいました。本当に不信仰でした。ここで弟子達が見せているのも、「信仰の皮を被った不信仰」の姿ではないでしょうか。

では、弟子達はどうすれば良かったのでしょうか。どうすることが「信仰の姿」だったのでしょうか。あるクリスチャン・ビジネスマンの証を聞いたことがあります。その方は、65 歳で数億の借金を背負ってしまったのです。そこをどうやって通って来たのか。「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです」(ヘブル 13:8)という御言葉がありますが、「『神は生きておられる。神の愛は変わらない』。そこに信頼して、今自分が出来る最善を尽くして来た。そこに神が働いて下さった、不思議を為して下さった。そうやって通って来た」と証しされました。恐らくここで期待された信仰の姿というのは、イエス様が寝ておられるのを見ながら、それでもイエス様に信頼して―(「イエス様がおられるではないか。イエス様には必ず何かのお考えがある。私達に悪くされるはずはない」、そう信じて)―せっせと舟を漕ぐ、船底に水が溜まったらせっせと水を掻い出す。イエス様に信頼するが故に、後のことはイエス様に―(神様に)―委ねて、自分達が今できる最善のことをする、それが、イエスが弟子達に求められた姿

だったのではないでしょうか。それが、今も信仰者に求められている姿ではないでしょうか。そして、それがまた、本当の意味で「委ねる」ということではないでしょうか。

2. メッセージ：主イエスを信じて歩む

私達は、この個所からどのような信仰のレッスンを受け取れば良いのでしょうか。弟子達は最後に問います。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう」(41)。「いったいこの方は誰だろう」。私達は、イエス様を、どのような方として捉えれば良いのでしょうか。この個所が教えるのは、「私達が主と仰ぐイエス様は、嵐に向かって『静まれ』と言えば、嵐を静めることが出来た、そのようなお方である」ということです。嵐に対する命令は「黙れ、静まれ(落ち着け)」(39)と非常に簡潔でした。命令が簡潔なのは、それを完全に支配下に置いておられるからです。くどくど余計なことを言う必要ななかったのです。しかし弟子達は、それを認めることが出来ずに恐れました。弟子達は、奇蹟的な癒しを為さるイエス様は見ていました。しかし、まさか自然界を支配なさる方だとは思っていなかったのです。弟子達は、イエス様を、奇蹟を為さる、しかし親しみのある人間としてイメージしていたのではないでしょうか。その意味で、イエス様を小さく見ていたのではないでしょうか。

私達も—(「私も」と言うべきか)—時に、大きなイエス様を信じることが出来ずに恐れるのではないでしょうか。思いもよらないことがやって来た時、あたかもそこに、イエス様は—(神様は)—おられないかのように怖じ惑う。しかし、ある神学者は言いました。「恐れは不信仰からやって来る」。痛い言葉です。でもこの個所は私達に「主イエス・キリストの『この自然界さえも治めておられる権威』を認めるように、そしてその権威で私達の歩みをしっかり守り導いておられることを信じるように、信じて、信頼して、委ねて行くように」、そう呼びかけるのです

しかしそうは言っても、私達の信仰は様々な出来事の中で揺れます。神の力を、神の配慮を疑う時があります。私は今、コロナ禍の中で信仰を教えようとする本を読んでいます。「ある人々が『神はいるのか』と言うに違いない状況で、なお神を信じるところに、コロナ禍を通り抜ける唯一の道がある」ということを語っている本です。本の中で、私達がイエス様を—(神様を)—信じることが出来る根拠として上げられているのは、イエス様が十字架に架かって下さった方だと言うことです。次の言葉が繰り返されています。「キリスト者は、試練に関する問題を解決した人たち達ではありません。私たちに代わって苦難を受けた神を信頼し、愛することを知った者です」(ジョン・レノックス)。

最近、ある方の証しを送って頂いて読みました。一部分だけの紹介になりますが…。その方が、鬱状態の中で、ある人を赦せないでいた時、夢を見ました。夢の中で、手に槍を持って何かを突き刺していたのです。何か月かして、その夢の続きが、幻となって目の前に現れました。何と、彼女が突き刺していた相手の顔が見えましたが、それはイエス様だったのです。イエス様は言われたそうです。「いいんだよ。私を突き刺しなさい。十字架に架かったということは、全てのことが含まれているんだよ」。彼女は、自分の罪を赦すために十字架に架かって下さったイエス様、そのイエス様の十字架が本当に生々しい現実になったそうです。「この方に信頼しないで、誰に信頼するのか」、そういう心境であられたのではないかと思います。私達の信じる主は、そういう方です。その方が私達と共にいて下さいます。その方は、自然界でさえ、創造し、支配しておられる方なのです。悪の力が働いていますから、悪は自然界にあっても私達に禍を為します。コロナ禍も、そうかも知れません。しかし、だからこそ初めにご紹介した、コーリー・テン・ブームの言葉が迫って来ます。「…自分自身を見れば、落ち込むでしょう。しかしキリ

ストを見上げれば、心に平安が訪れます」。ここに真理があるのではないでしょうか。この神様を信じ、委ねて行きたいと願うのです。同時に、私達と共にイエス様がおられることを信じて、私達にも、神の力の及ぶことを祈りながら、せっせと舟を漕ぐ、水を掻い出す、そのような信仰生活でありたいと願います。

3：最後に

最後に、この個所から「教会として」学ばなければならないことがあります。イエス様は寝ておられた。寝ておられたとは、どういうことでしょうか。イエス様は、もちろん神に信頼しておられた。しかし同時に、弟子達にご自分を任せておられたということです。弟子達に「ご自分を運ぶ務め」を与えて、寝ておられたのです。弟子達は、一生懸命イエス様を運びました。(しかし途中で恐ろしくなりました)。教会はイエス様に「私を運ぶように」とイエス様の仕事を委ねられているのです。「そのようにして主イエスの歴史に参加するように」と招かれているのです。教会には色々なことが起こります。コロナ禍のような、思いもしない突風のようなことがやって来るかも知れません。しかしここで「いったいこの方はどういう方なのだろう」(41)と問うた弟子達は、イエスがやがて死の力を打ち破って弟子達の前に現れた時、「イエスの復活」を確認した時、もう「この方はどういう方なのだろう」と問うことをしなくなりました。むしろ「イエスとはどういう方なのか、イエス以外には救いはないのだ」と語り始めたのです。ある時、お世話になった方の葬式に参列しました。「ヘブル書 11 章 4 節」に「彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています」という言葉がありますが、「召天された方の信仰の生涯」がその会場を―(私達の魂を)―何か豊かなもので満たしている、魂を揺さぶられる思いでした。先週の敬愛する兄弟のご葬儀でも、同じことを感じました。「死」という、嘆き悲しむしかないように見えるその空気さえ、「主にある生涯の力強さ―(希望)―」は、打ち破って行くのです。「福音の力」を感じました。私達はこの信仰を感謝します。そして一人でも多くの方にこの希望をご自分のものにして頂きたいと願います。イエス様は教会を頼りにしておられます。だからこそ「困難があっても、教会という舟を漕ぎ、水を掻い出し、その舟の中で神の業を経験しながら、心に働く神の奇跡を経験しながら、イエス様を運び続けるように…」と、この箇所は私達を励ますのです。